

盛谷智之氏を偲んで

西村 昭¹⁾

元地質調査所海洋地質部長盛谷智之氏が昨年(2022年)2月25日に逝去された。行年87歳だった。32年間(1959年4月～1991年8月)の長年にわたり勤められた地質調査所での仕事を紹介し、感謝と追悼の意を表したい。

盛谷氏は1934年(昭和9年)4月20日に広島県で生まれ、広島大学を卒業し、1959年4月に地質調査所に入所された。地質部に所属した12年間は地質図幅作成のための地域地質研究業務に携われ、東北地方・中部地方の5万分の1図幅「深浦地域」・「米内沢地域」・「下田地域」、及び20万分の1図幅「七尾・富山」・「深浦」を作成された。その調査の中で各地の新第三系の層状マンガン鉱床の層序的位置と鉱床の特性の検討を進められ、多数の論文にまとめられた。1975年にはその集大成として広島大学の学位(Geology of the Miocene bedded manganese ore deposits in Japan;日本の中新世層状マンガン鉱床の地質)を取得された。

地質調査所では1950年代から沿岸域の海底炭田や海底砂鉄の調査、及びその調査技術の開発が行われていた。1960年代半ばから日本国内の海洋開発の機運が高まる中、1968年に水野篤行氏を中心に海洋地質の調査研究を進める組織編成へ向けて動きだした。盛谷氏は1970年2月から1年間、米国東海岸にあるウッズホール海洋研究所に在外研究で留学し、深海のマンガン団塊の成因の研究をされた。その間、海洋地質に関連する学術の現状・調査手法などの最新の情報の収集も行われた。そして、初めての海洋地質の調査研究組織となった地質部海洋地質課の発足(1972年7月)とともに同課に所属し、1974年7月の海洋地質部の設立で同部海洋鉱物資源課所属とされた。

発足当時の海洋地質部は、1974年4月に建造された地質調査船「白嶺丸」の調査航海で、日本周辺海域の海洋地質図作成とマンガン団塊を対象とした海底鉱物資源の調査を2本柱としていた。マンガン団塊の調査では、1975年から中部太平洋海域での毎年60日間の調査航海が行われた。盛谷氏は1976年～1978年の3航海(1977・1978年では調査の実施責任者の航海主席研究員)に参加され、マンガン団塊の記載やその後の関連データの解析、及び航海報告書のとりまとめを担当された。1976年の調査から欧米の



お写真は2004年に撮影

先進的な研究で使用されていたマンガン団塊の外形と表面の構造(滑らか・粗い)を合わせた記載を適用し、その後の記載スタイルを確立された。マンガン団塊は水深5000mを超える海底表面に存在し、地質調査所の調査海域のマンガン団塊の形状や賦存量(単位面積あたりの重量)は変化に富んでおり、その成因(形成プロセスやその形成規制要因)の研究には恵まれた海域であった。その中で、音波探査による地形・堆積層の変化や深海堆積物の種類・堆積速度とマンガン団塊との関係を検討する際に、盛谷氏が基礎を作られたマンガン団塊の記載が大いに活用された。

1979年12月より1981年7月には地質調査所海外地質調査協力室で地質調査所の国際活動支援や海外機関との協力調整に努められた。1982年4月に海洋地質部に復帰され、同部海底鉱物資源課長、1984年4月から海洋地質課長、1988年4月からは海洋地質部長として所および部の運営・研究計画の策定・実施等に尽力された。この間にも、航海主席研究員として2度の日本周辺海域の調査航海(「種子島・野間岬沖」(1984年4月～5月)、及び「経ヶ岬・ゲンタツ瀬」(1987年9月～10月))に参加された。さらに、石油公団(現在はエネルギー・金属鉱物資源機構)の南極地域石油天然ガス基礎地質調査の南極海域調査航海では、副主席研究員として「クィーンモード・ランド沖海域(昭和基

1) 産総研 地質調査総合センター地質情報研究部門 名誉リサーチャー

地沖にあたる)」(1985年12月～1986年2月)に参加された。1988年にその後の日本周辺海域の海底熱水鉱床の調査・探査の隆盛の契機となった沖縄海域の伊是名海穴での海底熱水鉱床の発見があり、部長職としてその調査研究の推進のため航海計画や関係機関との調整に奮闘された。また、総理府の海洋開発審議会海洋鉱物資源・エネルギー部会や資源エネルギー庁の海底熱水鉱床及び地形調査技術に関する検討委員会など、多数の政府・研究機関等の海洋関連委員会に地質学の専門家として参画し、海洋開発政策等の策定や発展に寄与されている。

アメリカでの海外滞在研究・科学技術庁への出向・海外地質調査協力室の実務経験を活かし、アメリカ・ドイツ・フランスを中心とした国際的な研究交流(海洋地質・海底鉱物資源に関するワークショップの開催・共同研究など)の基礎作りに貢献された。環太平洋エネルギー鉱物資源協議会環太平洋地図計画の北西区画パネルの委員・議長としての国際共同による資源図の作成に貢献された。また、国際協力事業団の「沿海鉱物資源探査集団研究コース」の地質調査所での研修教育では、海洋鉱物資源と海洋地質図作成の講義を十数年にわたり担当し、発展途上国の若手研究者の育成に貢献された。さらに、英語・ロシア語の優れた語学力を發揮し、地質関係の教科書や専門書の翻訳者・監修者として1967年～1984年に多数の訳本の出版をされている。学会関係では、海洋調査技術学会の評議員、東京地学協会の編集委員・理事・副会長をなど歴任し学会の運営発展に地質調査所在任中から退官後も寄与されている。

1991年8月に地質調査所を退官後は、住友建設(株)(現在は三井住友建設(株))に理事待遇職として十余年勤められ、地質調査所での経験を活かし、大規模土木工事の遂行

や若手地質技術者の育成に貢献された。2004年の春に、長年にわたる地質調査所の研究業務や所の運営の遂行、国際協力事業の推進、政府や関連機関の委員・学協会の役員としての貢献等により瑞宝小綬章を受章された。

私は地質調査所に海洋地質部設立4年後で調査所の溝ノ口からつくばへの移転の前年(1978年)に採用され、海洋地質部の所属になった。採用時から移転までの1年半の間、盛谷さん(以下、「さん」と呼ばせていただく)の部屋に居室して、調査所や海洋地質など様々なことをお教えいただいた。入所した年に開催された日米天然資源の開発利用に関する日米会議海底地質専門部会の会合では、事務局をされていた盛谷さんの手伝い役で参加し、海洋地質関連の国際交流の現場を勉強させていただいた。残念ながら調査航海を盛谷さんと共にすることはなかったが、マンガン団塊の調査航海に堆積物の調査研究担当として1979年から5回の調査航海に参加した。深海堆積物とマンガン団塊の形成の関係の検討結果の論文作成の際には、盛谷さんから調査経験と語学力をもとに種々の的確なアドバイスをいただいた。また、盛谷さんが部長職の時期に、私が1年間科学技術庁研究開発局海洋開発課に出向となった際には、出向明けすぐに深海掘削航海に参加の予定があり、その準備と研究活動が行えるように調整いただいた。退官された後も図書室にはよく来られ、お会いする機会があった。また、盛谷さんからは、時々お電話をいただいた。最後にお話しできたのは2020年12月で、元気なお声で近況をお話しされていた。

盛谷さんの温厚で楽しそうに話される笑顔を思い出します。ご冥福をお祈りいたします。

NISHIMURA Akira (2023) In memory of Dr. MORITANI Tomoyuki.

(受付：2022年11月21日)